

Title	多摩川と旧東海道：特に名称と架橋に関して
Sub Title	The River Tama and the Old Tokaido Road ; its names and the bridge works
Author	西岡, 秀雄(Nishioka, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.2/3 (1963. 9) ,p.77(189)- 96(208)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松本芳夫先生古稀記念
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0081">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19630900-0081</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 多摩川と旧東海道

——特に名称と架橋に関して——

西岡 秀雄

一

多摩川はその源を山梨県東山梨郡神金村の山中、水干山ミツホシから発しているが、この水源が明白になつたのは、意外に新しく明治十三年のことである（「武蔵国玉川泉源巡検記」明治十三年六月参照）。そして山梨県を越えて都内に入ると小河内村で、東京都民の上水道としての小河内貯水池に入る。小河内ダムから青梅附近までは「奥多摩」と俗称される峡谷をなし、両岸には数段細長い河岸段丘が見られ、狭長な耕地や青梅街道（俗に甲州裏街道）がそこにあつて、小集落が線状に点在している。多摩川は谷口集落である青梅市のところから山地を離れ、武蔵野台地と多摩丘陵との間をほぼ東南東に流れ、調布市から下流は東京都と神奈川県との境界をなすつゝ、東京湾に注いでいる。河口の六郷川附近は、東京湾にかなり突出した「羽田洲」と呼ばれる三角洲をなし、埋立工事と相俟つて羽田国際空港や川崎工業地帯を形成している。

二

ところで、この多摩川の名称について、その起源をアイヌ語の「沼」や「沼の湿地」を意味するトマとかトマンに由来するという説がある。すなわち、菱沼右一著「アイヌ語よりみた日本地名新研究」(中央情報社一九三九)によれば、

アイヌ語にトマン又はツマンと云う湿地に付けられる言葉がある。即ち *Toman* である。「沼の湿地」と云う。時としては「沼」をもトマンと云う場合がある。もう一つはトマ *Toma* である。「沼の澗」と云う。樺太には船澗と云つて水扁に間を書いて「マ」と云つて立派に日本語になつている。「湾」と云う程の大掛りでもない小湾を「マ」と云うのである。

と記し、特に多摩に関して

常陸では「妻」を当てゝツマと読み、東京府下では「多摩」と、当字を行つて「タマ」と読ませている。その地形と地方の変化し来つた自然的コンディションは全く同一である。治水なき時代に在つてはその多摩川の両翼の湿地には無数の「タマ」と呼ばれる地が散在していたであらう。現在ですらも多摩村と呼ばれる本村が数ヶ所に及んでいる。

此地に「福生」と書いて「フッサ」と呼ばれる地の如き沼川に關係のあるアイヌ地名を探せば相当に採取が出来るのである。

「タマ」と「溜り<sup>たま</sup>」とは關係があるのじやないかと思われる程「溜池」の如きは取りもおさずトマ、タマである。と言及している。トマに關聯して、苦米地<sup>トマベチ</sup>という名称が想い出されるが、その由来についても、山田秀三著「東北と北海道のアイヌ語地名考」(楡書房一九五七)によれば、

大きな馬淵川<sup>マベチ</sup>の岸に「苦米地」の地名がある。この淵も米地<sup>ベチ</sup>もアイヌ語の「河<sup>ベツ</sup>」のことらしい。「苦」に似たアイ

又地名語にはトマ（えんごさく。「食用植物」）、トマム tomam（谷地〔低湿の荒地〕ニタツと同義）がある。土地柄谷地川トマムベツではないかと考えていた。北海道には十勝国にトマムベツ（やちち川、地名解による）の地名がある。又日高国幌泉郡の地図には、語義は判らないがトマベツの地名が書いてある。

と述べている。しかしながら、多摩川のタマが、本当にこうしたアイヌ語のトマに由来するのかどうか、その当否については今しばらく置いて別の機会を待ちたい。

### 三

本稿においては、多摩川の名称が、古文献の上において、どのように記されてきたかを探索してみたい。

多摩川に関する名称が文献に初めて現われるのは、「日本書紀」卷十六、安閑天皇元年の条下に、

武蔵国造笠原直使主、与同族小杵相争国造、経年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君  
小熊、而謀殺使主、使主覺之走出、詣京言状、朝廷臨断、以使主為国造、而誅小杵、国造使主悚喜交懷、  
不能黙已、謹為国家奉置横渟、橋花、多氷、倉櫟、四処屯倉、

とある記載で、武蔵国の多摩川流域に横渟・橋花・多氷・倉櫟の四カ所に屯倉ミヤケが置かれたとある。「六国史」（朝日新聞社刊）の註に佐伯義一氏は、横渟は武蔵国横見郡、橋花は同国橋樹郡、多氷は氷が末の字の誤りで多摩郡、倉櫟は倉樹（久良岐）の誤りとすれば海月郡（久良郡）ではないかと推定されている。吉田東伍著「大日本地名辞書」（富山房一九〇三）の多摩郡の条下には、

多氷は多氷タマ（もしくは多末）の誤にて、米摩は一声の転なり、米字を氷に謬りしならん。桓武紀、延暦七年、武

蔵宿禰弟総、多米連福雄、並授外從五位下、以貢獻也と云うは、多米郡当国の在名を氏号に負へるにて、武蔵宿禰と共に挙げられしは、其多摩に同きを知るべし。(姓氏録に多米連あり、三河国に多米郷あれど、此なる多麻の多米と相渉る所なかるべし)

云々と言及されている。そして吉田博士は「大日本読史地図」(富山房一九三五) 上に、先述の安閑紀に見える多氷の屯倉を、現在の調布市附近に、「多末屯倉?」と疑問符を附して比定されている(同書第四図上代の東国参照)。近年、西岡虎之助・服部之総監修の「日本歴史地図」第七図主要氏族の分布と屯倉(全国教育図書株式会社一九五六)では、同一附近に「多米」の屯倉を載せ、末は米の字を用い、タメと特にふり仮名をつけている。

次に多摩川に関する第二の古文獻は、現在でも調布市とか田園調布などの地名にその名を残している、衆知の租庸調の調布に関する「万葉集」巻十四の中の一和歌すなわち

多麻河泊爾 左良須氏豆久利 佐良佐良爾奈仁曾許能兒乃 己許太可奈之伎  
たまがわに さらすてづくり さらさらになにせこのこの ここだかなしき

であろう。万葉仮名では明かに「多麻」という文字が用いられている。

その後「続日本後紀」の仁明天皇の天長十年五月丁酉の条には、

武蔵国言、管内曠遠、行路多難、公私行旅、飢病者衆、仍於<sup>○</sup>多磨<sup>○</sup>入間兩郡界<sup>○</sup>置<sup>○</sup>悲田処<sup>○</sup>、建<sup>○</sup>屋五宇<sup>○</sup>、介從五位下当宗宿禰家主以下、少目從七位上大丘秋主已上六箇人、各割<sup>○</sup>公廩<sup>○</sup>、以備<sup>○</sup>餽口之資<sup>○</sup>、須<sup>○</sup>附<sup>○</sup>帳出挙<sup>○</sup>、以<sup>○</sup>其息利<sup>○</sup>充<sup>○</sup>用<sup>○</sup>、相承受領、輪転不<sup>○</sup>断<sup>○</sup>、許<sup>○</sup>之<sup>○</sup>、

とあつて、多磨郡の名称が見え、入間郡との境界に悲田所設置の件を記している。また同じ仁明天皇の承和十三年五月の条下に、

武蔵国言、多磨郡。狛江郷戸主刑部直道継戸口、同姓真刀自咩、為同郷刑部広主妻、生四男三女、経廿一年、夫乃死矣、真刀自咩、居喪有禮、事死如生、墳側結廬、晨昏悲泣、推移歲月、終始不渝、見其操行、可謂節婦者、勅、宜特授二位二階、兼終身免同戸田租とあつて、多磨郡狛江に租税を免ぜられたり位階を授けられるほど貞節な妻がいた話が残っている。

これ以後、「延喜式」あるいは「倭名類聚抄」・「今昔物語」・「吾妻鏡」など多くの書物に、多磨郡あるいは多磨河の名称が散見するのであるが（後表参照）、多磨を多摩と書くのは、「以呂波字類抄」からのようである。また、多摩や多磨の字に対して「玉」の字を当てるのは、文治年間「袖中抄」巻十五が初見らしい。ともかくも、文字が多麻・多磨・多摩、あるいは玉などなんであろうと、「タマ」と発音したことは事実と思われるが、この「タマ」系の発音に対して、他方に「タバ」と濁音の入る発音のあつたことも既に判つており、しかも「タバ」川という方が「タマ」川より正しいとなす論者も江戸時代にいた。それは文政十三年の小山田与清「多磨河考」一卷（温知叢書所収）で、煩をいとわず重要部分を引用して置こう。

多磨河は、安閑記に、多氷屯倉見えて、多氷は、即多磨の通音なり、万葉集には多磨と書たれど、仮名書なれば、正例にはしがたし、延喜式に、多磨とも多麻ともあれど、此は続日本紀、元明天皇和銅六年五月甲子詔に、畿内七道諸国郡郷名、著好字、延喜民部式に、諸国内郡里等名、並用二字、必取喜名など定められし後なれば、多麻とあるかたは誤字なるべし、倭名鈔の国郡部は、民部省の帳などに据れりとみえて、いと正しき躰なるに、多磨と書て、太婆と訓註せられたり、然れば多氷とも、多麻とも太婆とも、相通じていえる中、歌には調を尚て通音もまじれば、式と倭名鈔に据て、多磨と書き、多婆と訓を正とすべし、日本霊異記、旧本今昔物語、以呂波字類抄に、

多磨郡、又は武家記録のおやなる吾妻鏡にも、多磨河とあれば、かたぐしかるべくや、玉河と書は、建保の頃より後、光る、磨く、などいう詞を詠合せし歌によれるにて、袖中抄にも其名に就て児玉郷におこりたらんよし注せし也、寛永以後偽作したりけんとおぼゆる総国風土記に多磨、或は玉、また多磨とも見えたれど元禄以前の正き書に、多磨と書るはたえてなし、仁安年中の経筒の銘に、多波郡、日蓮注画賛に、田波河、私案抄に多波河、神名鏡に丹波河、などあるも多磨とはいわざる證也、されば多磨河と書て、太婆我波と訓むを正しとはいう也。

と述べ、さらに

水源甲斐国都留郡船越村におこり、東隣の丹波山村を過て丹波川と号し、さや川村、鴨沢村をすぐ、以上の四箇村、往古は武蔵国多磨郡内なりしが、後甲斐国に隸たりけんとおもうは、靈異記、今昔物語にみえし多磨郡鴨里は、今の鴨沢なるべければ也、さて多磨郡小河内、境、白尾、棚沢、丹波村を経、多磨郡中を流れ、荏原郡羽田の海におつ、其間上道四十里許也、丹波村は、大丹波、小丹波と二に分れて古の多水屯倉は此処にや、又は丹波山村ならんもはかりがたし、郡名も丹波山、大丹波、小丹波の里の中よりおこり、其郡内を流るゝ川なれば多磨河と称し、歌には調よからんために、通音もて多麻河とよみ、遂には珠玉の意にもとりなして詠み出ることゝはなれる也、郡は、建長の頃より文禄の頃までは、多磨河を境て、東を多東郡、西を多西郡とし、其後古に復して一郡に合せ、字も多磨とは書かへたるにこそ。

と解説している。ところで、吉田東伍博士はこの小山田与清の「多磨河考」を参照する機を失したのか、先きに引用した「大日本地名辞書」の多磨郡の項には、

万葉集に多麻河泊と見え、延喜式、多麻、多磨并用す、仁明紀には多磨郡とも、多磨郡とも載す。和名抄、多磨郡

十郷に分ち、(高山寺本に、六郷さへなきは、脱簡に出ヌ)太婆と注す、今も丹波川、丹波山の称謂なれば、共に古言に出てしを悟るべし。其郡域は多く隣郡と出入し、古今沿革あるを知るも、詳に弁し難し。勢多の一郷の荏原郡へ転したる、独明白なり。国郡沿革考云、多摩は古来多麻、又多磨に作りしが、天保国図に多摩に定め、今仍之に因る、中古二郡に分ち、多東、多西と云う、其境界を推すに、大略大河に因りて其東西を分ちたり、天正の末、徳川氏東遷の後に至り、復古して一郡と為す、明治十三年、東西南北の四郡に割る。

と全く小山田与清の「多摩河考」には触れず、別途に記述されている。また吉田博士は「玉川」の字についてもなぜか触れていない。そして小山田・吉田両所見を比較して注意すべき点は、前者が元禄以前の書物に「多摩」と書くことは絶無であると述べたのに対し、吉田博士は、仁明紀に多磨郡と多摩郡とを載せていると言及した点である。残念ながら筆者はまだ多摩郡と記した仁明紀を見る機会に恵まれない。仁明紀つまり「続日本後記」は、文徳天皇の斉衡二年二月勅撰の詔を下され、清和天皇の貞観十一年八月に撰修されたとはいえ、いま伝世の「続日本後記」は天文年間の写本やそれ以降の版本や校訂本であつて、これらを仮に全部見ることができたとしても、小山田・吉田両所見の真否黒白を決することはできない。つまり、吉田博士の記するごとく、幾つかの仁明紀の写本や校訂本の中に、多磨郡を多摩郡と書いてあるものが事実あつたにしても、元禄以前から原本にそうあつたのかどうか判らない。また、吉田博士自身は、元禄以前にも多摩と書いた本があるなどと主張してゐるわけでもない。単に仁明紀と書いて、決して年代を云々しているわけではない。

したがつて、江戸時代に小山田与清が「多磨河考」を執筆するとき、『元禄以前の正しき書に、多摩と書きたるはたえてなし』と断言したと、明治時代に吉田東伍博士が仁明紀に多摩郡の字を用いてゐると述べたことが、矛盾する



とは限らない。むしろ、博士のいう多摩を記した仁明紀が元禄以降の写本であれば、両説とも真実であろう。

しかし、吉田博士は『天保国図に多摩に定め、今仍之に因る、』と述べられているが、事実はこれより四〇年ほど早い寛政九年、「東海道名所図会」巻六の玉川の条下に

六郷川の本名也又多摩たまとも書す多麻は武蔵の郡名也六玉川の其一つにして古詠多し

云々と見えているし、文化年間の「新編武蔵風土記稿」にも、その巻五十八に

「和名鈔」郡名の部に、橘樹の二字の訓を太知波奈と註せり、後世或は立花としるせるものは誤なり、其地の界域は中古より甚変革あり、古のさまは今よりしるべからずといえども、試に和名鈔に載る所の郷名をもて今の地理を察するに、その郡中甚せばかりしと見ゆ、今の都筑郡高田村の辺より多摩川の涯に至り、夫より川崎宿の辺を限として、南の方は今の神奈川の辺にて久良岐郡に接せり

云々と多摩川の字が見られるし、同書巻七十二にも

川崎宿は郡の北の堺多摩川の涯にあり、東海道五十三駅の一なり、

と多摩川の文字が用いられている。そして、天保年間の「江戸名所図絵」巻二の六郷渡の条下では

此川は多摩川の下流にして八幡塚より河崎の駅への渡しなり。

とあり、同書の羽田弁財天社の挿絵の説明文中には

南に玉川混々として清流の富峰の雪に映えるあり。

云々とあつて、「江戸名所図絵」では多摩川と玉川と両者が用いられている。

つぎに玉川または玉河のように、「玉」なる文字を用いた点について、既に紹介したごとく小山田与清は『玉河と書くは、建保の頃より後、……』云々と述べているが、なにを根拠にして建保という年号が登場してきたのか明らかでない。また吉田東伍博士は全く玉川には触れていない。筆者は「袖中抄」の原本をみたことがないが、これに玉河が児玉郷に由来するとしてあるならば、これが一番古い文献かも知れない。はつきりした文献では、享保七年ごろ田中兵庫「玉川堂稿」に

玉川の名に驕るなり飛螢

の俳句がでたり、

古寺の軒端に近き玉川の 月をむかふの岡に見むにぞ

の和歌に「玉川」の文字が用いられている。また元文二年の田沢源太郎義章「小田原分限帳郡村略考」には

武州橋樹郡川崎宿なり。考うるに、永禄の頃は玉川此宿の南を流れ荏原郡の内になるゆへ、江戸川崎と云なるべし、今は此宿の北を玉川流によりて橋樹郡の内になる、却て此辺は玉河の南の方橋樹北の方は荏原にて玉川郡境也。

云々とある。宝暦四年四月七日、六郷側の名主より幕府に宛てた「水見廻役設置願」にも本玉川とか中玉川などの文字を用いている。さらに宝暦十年前後の加茂真淵の「岡部日記」には

六郷の渡は玉川にぞあらん。和名抄に此国に六座郷あり、同じ所にはあらずや此水上に多波川という里ありといへり。ことばのすみにごりにつけて、ふるき名なる事猶あらかなり。

とあつて、玉川より上流の多波川の名称が、「マ」が「バ」に濁つていたので古語であると、さすがに加茂真淵は国学者らしい見識を見せている。先きに紹介した小山田与清がその著「多磨河考」の中に、太婆タバと読むのが正しいと強調した

のも、加茂真淵の影響があつたかも知れない。多摩川に「タバ」系と「タマ」系の発言があつたことは事実であるし、別に不思議なことでもない。衆知のごとく同じ「馬」という文字が、競馬のときは「バ」、桂馬では「マ」と発言している例もあるし、先きに引用した「新編武蔵風土記稿」の文章中にも（八六頁八行目）、「狭<sup>せ</sup>まかりし」を「せば<sup>せ</sup>かりし」と、マとバの混用がみられるのも好例である。

## 五

最後に多摩川の下流六郷川の名称について概観しておきたい。本件に関しては六郷橋、ひいては玉川にいつ橋が作られたかという問題とからんでくる。

蔦垣老人「江戸旧事考」巻の四に引用されている「小田原記」によれば、

六郷に行方弾正居たりしが、己が屋敷の近所なる八幡に要害を構へ、稲毛の田嶋、横山駒橋等を引率し甲州勢を通さず、信玄は品川の宇多見石見守、鈴木等を追散し六郷へ出でられけれども、六郷の橋を焼落しければ池上へ懸りて池上寺を追捕す、此寺は甲州身延上人の弟子なりしかば彼僧出でて色々申しけるに依て寺をば焼ず、即ち此僧に案内させ矢口の渡を舟にて稲毛の平間と云所へ渡りて稲毛十六郷を追捕す。

とあり、武田信玄の軍勢を通さない目的で、六郷に陣を張つた行方弾正側では、六郷の橋を焼き落してしまつたと述べている。この小田原記に見える「六郷の橋」というのを、六郷村の橋々と考えずに、六郷川つまり多摩川の橋の意に解すれば、永祿年間（詳しくは永祿九年まで）多摩川の六郷附近に橋があつたことになる。しかし、この「小田原記」の記事については、賛否両論が江戸時代から既にあつて、「江戸旧事考」は「慶長五年の六郷橋は再興にあらざ」の題下で、

次のごとく否定的な意見を述べている。

抑も六郷の橋は、徳川家の入国のみぎりに南北の往来を便ならしめんが為に、文禄には千住へ慶長には六郷へ俱に大橋を渡されし時いずれも創造にて曾て再興にあらぬなり、名所図会の類を首めとし玉川紀行（成嶋司直）見目の幸、杉田禱記、用捨箱、三養雜譚、足薪翁百話、さへづり草等におのゝ其説ありて皆北条氏の時に古く此橋ありし故、徳川家の造られしは再興なりと言はるは甚しき僻説なるべし。さて此僻説は小田原記を信じたるものより起れるなり。

と、「小田原記」を盲信した凶書類を難じ、問題の「小田原記」に対しても

甲斐の兵の江戸を侵せしといふことは無論、品川より六郷辺を掠めしといふことも他の記録に絶えて載せざることにて最不審に堪えず、因て甲陽軍鑑を案ずるに、此役信玄は滝山を攻めて相摸川を踰えて小田原へ赴くとなり。又北条五代記を考うるに是にも帷子の辺とのみありて其の道筋江戸を経ざれば共に江戸及び六郷橋等のことに及ばず。按ずるに武田氏の事を記せしもの、仮令後人の攙入はあるにもせよ軍鑑より詳なるはなく、又北条氏の事を記せしものは三浦氏の五代記より精しきはあらず。然るに二書とも一語も六郷橋のことに及ばざるは怪むべき限りなり。或は五代記は北条氏の為に忌て闕きたりとも云べけれども、軍鑑に至ては是公のことにあらんには必ず大書して其功を誇るべきに、今然らざるを以て小田原記の信ずるに足らざるを知るべし。況んや天正以上は小田原への往還は中原道にして今の六郷筋にはあらざるをや……

と、蔦垣老人は激しく「小田原記」の不信を追求している。筆者も、以上の点については、「江戸旧事考」の考えに賛成であるが、次の所説には問題がある。すなわち、

古文書中に一二の證すべきものあり。八幡塚八幡社に伝えたる東照宮の御願文というものは

今月今日欲奉初渡武州荏原郡与橋樹郡境河新橋、其趣意……〔中略〕……

召石工居鍛冶、不日不月成功訖、煥巍々乎日域無双、雁齒百余間、古今稀有橋也

と見えて新創なることは知らるべし。一語も再興のことに及ばず。又芝二丁目名主源五郎所蔵、遠山奉文、江戸刑部輔宛の文書に六艘と芝船右従前出来儀は船橋舟何時も働 則、触次第無遅々様專一候云々とあり。思うに非常の際は六郷川へ船橋を渡す為の掟なるべきが、若し然らば六郷に橋なかりしことは益々明白となるべし。

と述べているが、最初の東照宮の御願文というものが、実は慶長五年六月二十三日でしかも征夷大將軍とあり、家康が征夷大將軍に補せられたのは慶長八年二月十二日であるから、この御願文というものの真偽について、もう少し研究を要するであろう。吉田東伍「大日本地名辞書」第四冊之上六郷の項では、偽作と断定している。また後の江戸刑部輔宛の文書に関しては、船橋云々の件がなぜ六郷川に限定して考えねばならないのか、先きの文章のみでは判断しがたい。しかし、ともかくも「江戸旧事考」の主張するごとく、慶長以前に多摩川に橋があつたということが疑わしい点は認めてもよいであろう。

次に六郷橋の名は、筆者の知る限りでは寛永二十年、林春齊の「癸未紀行」に

六郷橋吟

俗説畠山重忠 嘗居于此 雖不考干旧記 然重忠者 武州甲族而往来鎌倉 則不可 無其理 故首句及比

河崎東畔六郷里 俗称重忠居此村 重忠武州七党長 攻城野戦報君恩

攀竜附鳳勇功士 往事悠悠遺蹤蜿 橋去江城五里許 出者入者日頻繁

とあるのが一番古いが、これも六郷里とか六郷の橋とは書いても、六郷川という名称は見当たらない。「東海道名所記」にも

六郷の橋ながさ百二十間なり  
とか

六郷の川上には大なる鮎あり、橋の上より西のかたに大山みゆ、其道一日路有といふ。

などとあつて、六郷の川上とはあるが、未だ六郷川という固有名詞は発達していない。六郷川の名称は筆者が調べた文献中では、「川崎市史」の巻頭に複製されている明和二年の「玉川図」に

六郷川肝煎平左衛門図

とあるのが、初見であり、続いて「東海道名所図絵」巻六にみられる

玉川 六郷川の本名也又多摩とも書す

の記事や、文政八年の雲輔駅夫というふざけた名前の人が出した「五十三次道中詩選」の川崎のところ

往来旅人皆争<sub>レ</sub>先

我々急渡六郷川

爰有茶飯万年屋

自夫大師弁財天

の漢詩がある。時代が降つては明治五年に三代広重の描いた「六郷川蒸気車往返全図」などに、六郷川の名称が使われている。

## 六

ここで以上縷に述べきたつた多摩川に関する種々の名称を、タバ系・タマ系・六郷系に三大別し、タマ系はさらに、

多麻・多磨・多摩・玉などに細分して、時代順に一覧表を作つてみると次表のごとくなる。本文に引用しなかつた文献も含んでいる。また六郷橋架橋の有無に関する資料も載せた。

多摩川の名称の変遷  
ならびに架橋の有無 一覧表

年 号 (西曆)	文 献	名 称	架橋の有無
養老四年 (720)	*「日本書紀」卷十八 (安閑天皇元年)	多氷	
天平宝字三年 (759)	*「万葉集」卷十四	多麻河泊	
弘仁十三年 (822)	*「日本靈異記」	多磨郡	
天長十年 (833)	「続日本後紀」卷一	多磨郡	
承和十三年 (846)	「続日本後紀」卷十六	多磨郡	
延喜五年 (905)	*「延喜式」卷九	多磨郡	
延長元年 (923)	*「倭名類聚抄」卷五 (国郡部)	太婆	
天養元年 (1144)	*「以呂波字類抄」	多磨	
仁安二年 (1167)	経筒の銘 (渋谷、祥雲寺景德院蔵)	多波郡	
嘉応二年 (1170)	*「今昔物語」	多磨郡	
治承四年 (1174)	*「吾妻鏡」卷二	多磨河	

橋架... 印

文治年間 (一一八五)	*「袖中抄」卷十五
応永十三年 (一四〇六)	*「私案抄」
天文九年 (一五四〇)	*「神名鏡」下巻
永禄九年 (一五六六)	「小田原記」その他
永禄十二年 (一五六九)	「新編武蔵国風土記稿」
慶長年間 (一五九六)	*「拾芥抄」中巻
慶長五年 (一六〇〇)	川崎、森重天氏蔵基石
元和二年 (一六一六)	*「丙辰紀行」林羅山
寛永年間 (一六二四)	*「快運上人六郷橋修繕記」
寛永廿年 (一六四三)	*「癸未紀行」林春斉
承応二年 (一六五三)	玉川清右エ門・同庄右エ門兄弟上水開鑿下命
萬治元年 (一六五八)	*「東海道名所記」
貞享五年 (一六八八)	「天保手控」添田知道(「川崎市史」所収)
元禄二年 (一六八九)	「天保手控」添田知道(「川崎市史」所収)
元禄十四年 (一七〇一)	*「笠の蠅」不角の紀行(「用捨箱」所収)
宝永元年 (一七〇四)	*「誰袖の海」(「用捨箱」所収)
宝永四年 (一七〇七)	*川崎問屋名主田中兵庫の願書

多波河  
丹波河

多麻

玉河

玉川橋

玉川上水

玉川

六郷の橋  
六郷の渡  
六郷御橋

行方弾正が六郷の橋を焼く?  
〃

玉川橋新設  
橋の記事あり

六郷橋  
橋修繕

六郷橋  
橋吟

六郷の橋 橋長一二〇間

七月廿一日洪水により流失  
江戸町人二渡船無賃3年間負請  
船賃武家の外は二文

六郷の渡 土橋(九月三月間)かかる。



宝永六年	(一七〇九)	*「あまのさへづり」栖原雅楽雄						
享保五年	(一七二〇)	*「筑波紀行桜の実」(「用捨箱」所収)						川崎宿駅が渡船を爾今永勤
享保九年	(一七二四)	*「玉川堂稿」田中兵庫						田中兵庫、治水の命を受く
元文二年	(一七三七)	*「小田原分限帳郡村略考」田沢義章						
宝歴四年	(一七五四)	*「水見廻役設置願」(「川崎誌考」所収)						水見廻役設置願
宝歴十年	(一七六〇)	*「岡部日記」加茂真淵	多波川	玉川	六郷の渡			
明和二年	(一七六五)	*「川崎船場町の図」古宮吉之助蔵		玉川				
天明年間	(一七八一)	*「箏曲玉川」穂積頼母		玉川				
寛政九年	(一七九七)	*「東海道名所図会」卷六		玉川	六郷川			
享和二年	(一八〇一)	*「東海道中膝栗毛」十返舎一九	多摩	玉川	六郷の渡			
文化六年	(一八〇九)	*「玉川砂利」大田南畝(「新百家説林」所収)		玉川				
文化七年	(一八一〇)	*「新編武蔵風土記稿」卷五十八・七十二						
文政八年	(一八二五)	*「五十三次道中詩選」雲輔駅夫	多摩川		六郷川			
文政十三年	(一八三〇)	*「多磨河考」小山田与清(「温知叢書」)						
天保五年	(一八三四)	*「東海道五十三次続絵」安藤広重	多磨河		六郷渡舟			
天保年間	(一八三〇)	*「江戸名所図絵」卷二	多摩川	玉川	六郷渡			
天保年間	(一八三〇)	*「天保手控」添田知道(「川崎市史」所収)		玉川	六郷渡			

天保年間 (一八三〇)	*「調布玉川絵図」	丹波川	玉川	六郷の橋	
天保十二年 (一八四一)	*「用捨箱」柳亭種彦				
天保十四年 (一八四三)	*川崎領村々三役人の書付(「川崎市史」所収)		玉川	渡舟場	
嘉永元年 (一八四八)	*「知通公務日記」添田知通				
嘉永五年 (一八五二)	*「あまのさへづり」栖原雅楽雄				
安政七年 (一八六〇)	*川崎宿寄場組合御請書(「川崎市史」所収)	多摩川	玉川	六郷川	
明治元年 (一八六八)	*「六郷船橋架設計図」森五郎				
〃 (一八六八)	*「戊辰南園日記」		玉川	六郷船橋	明治天皇御東幸 ニツキ船橋設計
明治七年 (一八七四)	「川崎市史」			六郷渡	三十六艘の船橋
明治十一年 (一八七八)	「川崎市史」			六郷橋	俗ニ左内橋トイ フヲ架橋ス
明治十三年 (一八八〇)	*「武蔵国玉川泉源巡検記」(石井正義蔵)		玉川		左内橋流失
明治十六年 (一八八三)	「川崎市史」			六郷橋	木橋架設
明治卅一年 (一八九八)	*「長唄多摩川」永井素岳	多摩川			
明治卅六年 (一九〇三)	*「大日本地名辞書」			六郷	
明治四十三年 (一九一〇)	「川崎市史」				六郷橋流失
明治四十四年 (一九一一)	「川崎市史」				仮橋架設
大正二年 (一九一三)	「川崎市史」				八月仮橋流失 十月仮橋架設

大正十四年 (一九二五)	「川崎市史」	六郷橋	鉄筋コンクリート橋開通
昭和十四年 (一九三九)	*「川崎市史」	六郷川	

〔備考〕 \* 印のある文献は、その上記の年代に刊行されたことを示す、たゞし、刊行年代不詳のものは推定年代に「印をつけて、その大略の年代を示めす。

七

ともかく多摩川という一つの川の名称だけを取り上げてみても、いろいろの問題がひそんでいる。現在一般的に通用する多摩川の「タマ」の発音や文字が、いろいろと交転した事は確かである。

菱沼 右一……トマ (Toma)

佐伯 義一……タマ (多末) ↓タマ (多麻・多磨・多摩・玉)

吉田 東伍……

西岡 虎之助……タメ (多米)

小山田 与清……タビ (多氷) ↓タバ (太婆・丹波)

しかし、これらの発音が、それぞれのような方向に交転して行つたかとなると、非常に難しい問題である。僅かに類推できることは、現在の多摩川において、地理的にその本流の名称を概観すると、上流から下流にかけて

丹波川 ↓ 多摩川 ↓ 玉川 ↓ 六郷川

となつてゐる。これは前表にも明かなように概ね歴史的な流れとも一致しているところをみると、河川名というものが、歴史地理的にみて、河口から上流に行くほど古型を保つという原則が認められないであろうか。柳田国男氏の「方言圏論」では、文化中枢の地から次々と新しく言葉が発生するので、文化僻地の周辺部に行くほど古語が残存するというわけであるが、同じ理由によつて、河川は山間から平野、つまり人間の住みにくい所から、人間の多く生活し得る地域に流れている以上、下流の河口附近には新名称が生れやすく、旧名称が上流地区に残るといふ原則、別言すれば上流に古称、下流が新称、つまり河川名の「上古下新の原則」は認められないであろうか。相模川の下流馬入川、京都府を流れる大堰川・保津川・桂川、紀州の熊野川とその下流新宮川の呼称など、まだいろいろと実例はありそうである。

関ヶ原の合戦が行われた慶長五年、家康は東海道の多摩川に玉川橋を設け、翌慶長六年正月には東海道五十三駅伝馬の制を定め、慶長八年には家康は將軍職に任じ、江戸幕府が開幕されるや、大名統制策の一つとしての参観交代が実施され、翌慶長九年には東海・東山・北陸三道に一里塚を築き、東海道における人馬の交通は特に頻繁になつて行つた。したがつて多摩川における東海道の橋は、交通上日増に重要性を加えていたわけであるが、貞享五年七月廿一日の洪水で流失して以来は、幕府は多摩川に架橋をしなかつた。多摩川の水量が比較的少い九月から三月の間に土橋が作られた時代は散見するが、百数十年間も多摩川の渡河は渡船に頼らねばならなかつた（前表参照）。

明治に入つてからも、明治元年十月十二日に明治天皇の御鳳替が多摩川を渡られた場合、川中に三十六艘もの舟を横に並べ、船上に板を敷いて御東行されたほどであるが、明治七年に六郷橋（俗に佐内橋）が架設されてからも、すぐ洪水により流出し、大正十四年鉄筋コンクリートの六郷橋ができるまで、幾度か架橋が繰返えされている。

この六郷橋の右岸に位置する川崎は、渡津集落であると共に、東海道五十三次の江戸から二番目の宿駅として発展し

ていたのであるが、この川崎の宿場町が、東海道五十三宿の中で現在最高の発展率を示している点については、筆者はすでに「東海道五十三宿の盛衰に関する問題」(『史学』第三二卷 第一・四号 一九五八年一月)に発表したことがある。この時は、主として旅行者の特に一日行程を中心として、東海道五十三宿の全域にわたって、その盛衰を概観してみたのであるが、本稿では、東海道としては点にも等しい多摩川との交点、つまり六郷の渡し場を、交通量が増加し、附近が発達するにしたがつて、多摩川の名称は「多摩川」・「玉川」・「六郷川」といろいろの形で世に宣伝されて行つた姿を、眺めてみたかった。広重の名を世界的なものにした東海道五十三次の浮世絵(天保五年・保永堂版)の「川崎」でも、彼は「六郷渡舟」を画題とし、対岸に川崎宿を描いているし、同じ天保の頃から流行したといわれる有名な俗謡「お江戸日本橋」の歌詞にも、『六郷わたれば川崎の万年屋』云々とあるし、筆曲では「玉川」や「六玉川」、長唄に「多摩川」(明治四十一年、永井素岳作詞、五世杵屋勘五郎曲)、落語でも「六郷駕籠」と、視覚聴覚を通じて「多摩川」の名は広く人口に膾炙されて行き、現在なお「多摩川園」とか玉川田園調布・二子玉川など数多くの地名となつている。しかし顧みてその多摩川本流も特に上流、小河内貯水池よりさらに奥の山梨県側の多摩川が、今なお丹波川と呼ばれ、地図にもその名が書かれて、その古称を残している点や、その裏にひそむ歴史地理的な現象について、六郷の鉄橋を忙しく往来する現代の人々のうち何人が知つていようか。